

カントに於けるアンチノミー論に関する予備的考察（一）

——超越論的弁証論第二篇第二章第一節に即して——

草 野 章

『純粹理性批判』に於けるアンチノミー論ほど古来からの哲學的問題を、我々の認識能力との連関に於いて、明確に定式化したものは数少ないであろう。世界は時間および空間に關して有限か無限か

（第一アンチノミー）、物質は有限に分割可能か無限に分割可能か（第二アンチノミー）、自由による原因性は可能か不可能か（第三アンチノミー）、世界の最高原因としての必然的存在者は存在するか存在しないか（第四アンチノミー）——何れも人間の形而上學的思弁が無關心を装えず、その究極的解決を求めて止まなかった、哲學のいわば「永遠の課題」である。周知の如くこれら四つのアンチノミーはそれぞれ定立と反定立を有し、定立と反定立はそれぞれ教条論的主張と經驗論的主張を述べているのだが、數學的アンチノミーである第一及び第二アンチノミーの場合には、定立・反定立が共に偽であるとされるのに対し、力學的アンチノミーである第三及び第四アンチノミーの場合には定立・反定立が共に真たりうるとされる。特に前者に於いては、世界が無限であるというのも有限であるとい

うのも偽であるということから、「現象一般は我々の表象の外に於いては無である」という世界の超越論的觀念性がいわば裏面から証明されることにもなる。

單純に世界を如何に捉えるかということのみならず、我々自身の認識構造との根源的な関わり合いから必然的に現出してくる「世界」——その「外」なる世界については最早認識の対象とはなりえないという意味で、人間にとつて「無」であることが宣告される訳だが——を我々は如何に捉えねばならないかということに關する思索をアンチノミー論は我々に促すように思われるのである。これが内蔵する問題は極めて広汎かつ複雑であることが予想されるので、その内実に迫るためには、慎重に歩みを進めなくてはならない。本稿では、アンチノミー論に關する体系的考察のための予備的考察の一部として、四つのアンチノミーの構造に關するカントの議論の前提を構成している部分までを取り上げることになしよう。

一

我々は先ず超越論的弁証論第二篇第二章「純粹理性のアンチノミー」から始めよう。その冒頭は超越論的弁証論の緒言に於いて述べられたことの確認である。純粹理性の超越論的仮象は弁証的推論を基礎とし、これが伝統的論理学に於ける推論の三種の形式に対応して区分される。定言的推論に対応するのは、「純粹理性の誤謬推理」であり、仮言的推論に対応するのは、我々が目下携わっている純粹理性のアンチノミー論であり、選言的推論に対応するのは、「純粹理性の理想」である。純粹理性のアンチノミーが生ずるのは「現象の客観的綜合へ理性を適用する場合」であるが、「現象に於ける客観的制約の無制約的統一」を目指す理性は定立・反定立という、共に偽（第一および第二アンチノミー）または共に真たりうる（第三および第四アンチノミー）ふたつの主張の調停不可能な止むことなき争いの内から外へ出ることができず、従ってどこにも平衡点を見出せないにも拘わらず、アンチノミーは不可避の課題として理性にいつまでも立ち現れてくるものである。

「即ちここに人間理性の新たな現象が示される。即ちそれは全く自然な背反(Antithetik)は、何人も落とし穴を掘ったり、罠を仕掛けたりする必要はなく、理性が自らしかも不可避免的に陥るのである。そしてこれによって、専ら一面的な仮象がもたらす自惚れた確信という微睡みから守られるのだが、しかし同時に、懷疑的な絶望に身を委ねるか、教条的な強情という態度を取って或る主張を頑強に固

守し、対立側の諸根拠に耳を傾けて公平に扱うことをしないかの何れかの誘惑に晒される。両者とも健全な哲学の死なのであるが、前者はおそらく純粹理性の安楽死(Euthagie)と称せられえよう。」⁽³⁾

定立または反定立の主張の何れか一方を教条的に固守するか、ふたつの主張の狭間に身を漂わせ続けるか——それ以外に選択の余地はないのだが、それは「哲学の死」を意味する。しかし哲学がこれで以て死に至らないためには、哲学はこの「新たな現象」の発生という事実問題に甘んじていてはならないのであって、その発生理由の必然性を探究し、明らかにすることをその新たな哲学的任務として引き受けねばならない。純粹理性なくしてアンチノミーは生じないのであれば、アンチノミー発現の現場かつ根拠として、現象の無制約的統一を目指す理性の構造そのものが検討に付されなければならない。それは取りも直さず、カントの場合で言えば、超越論的觀念論という新たな認識論の枠組みの中でこの現象を考察するということに他ならなかったのである。哲学が一般に原理的なもののへの限りなき遡行という運動形態を取るものであるならば、そしてその遡行を遂行するのが人間であり、また原理も遡行も人間の認識の営みを抜きにしては語れないものであるならば、人間の認識という見地から哲学の問題に接近しなければならないという、近世哲学の主流の根幹となった考え方をカントは超越論的觀念論によって根源的に表明していると言えるであろう。

さて現象の綜合の絶対的総体性に関する理念は「世界概念」である。カントにあっては「世界」全体は専ら理念であり、それ自体と

しては完結した経験の対象になりえないものであるにも拘わらず、認識の完結を目指す理性は世界認識の統一に向かわざるを得ないが故に「世界」に関してのみアンチノミーの問題が生ずるとも言える。「世界」の理念は結局経験の対象である現象（の系列）と重なり合わない。超越論的分析論の成果では、現象の統一者は悟性であったが、カント自身が言うように、悟性による統一は理性が目指す世界の統一にとつて狭すぎるし、そもそも理性による世界の統一は上の理由で不可能なのである。我々は、「純粹理性のアンチノミー」の第一節「宇宙論的理念の体系」の冒頭を参照して、この辺りの事情を確認して置く必要があるだろう。カントはそこで注意点をふたつ挙げていたので、先ず第一のそれから見てみよう。

「さて、これらの理念をひとつの原理に従い、体系的嚴密性を以て枚挙しうるために、先ず第一に着目せねばならないのは、純粹超越論的概念がそこから発現しうるのは悟性のみであること、理性は本来何の概念も産出しないで、せいぜい可能な経験が持つ不可避の制限から悟性概念を解放し、従つて経験的なものの限界を越えながらもそれとの結合に於いて悟性を拡大しようと努めることである。こうしたことが起こるのは、所与の被制約者に対して諸制約の側で（これらの諸制約の下で悟性は全ての現象を綜合的統一に服従せしめるのであるが）絶対的總体性を要求することによつてであり、しかもこれによつてカテゴリーを超越論的理念とし、経験的綜合に、無制約者（これは経験に於いては決して見出されず、理念に於いてのみ見出される）に至るまでそれを継続することで絶対的完全性を与

えるのである。理性はこれを次の原則に従つて要求するのだが、その原則とは、被制約者が与えられているならば、制約の總計も与えられており、従つて、それによつてのみ被制約者が可能となると、この端的な無制約者が与えられている、という原則である。それ故、第一に超越論的理念は本来無制約者にまで拡大されたカテゴリーに他ならない。しかも超越論的理念はカテゴリーの綱目に従つて配列されたひとつの表にもたらされるのである。」

「概念の産出」を行うのは悟性であつて、理性はこれに関わらない。理性の任務は悟性の「拡大」であり、それによつて認識の「絶対的總体性」が目指されることになる。我々の経験は時間の内に展開していくから、元来完結することはありえないが、理性は世界認識の統一を目指して、悟性の行う経験的綜合に完結性を与えようとするのである。経験の対象は被制約者であるが、被制約者の制約の系列は最早それ自身制約を持たない無制約者を俟たなければ完結しない。現象の絶対的統一を目指す理性は従つて無制約者へと赴こうとするが、悟性のみが現象を統一するカテゴリーを有しているが故に、理性は悟性のカテゴリーを無制約者にまで駆逐することによつてそうするのである。これ以外に理性は現象の絶対的統一に至る術を持たない。超越論的理念は悟性による経験の対象に本来なりえない現象の絶対的總体性を飽くまでも悟性のカテゴリーによつて把握せんとする所に生ずるのである。言換えれば、悟性による「統一」の「拡大」がその終結点を、経験の対象に決してなりえない無制約者の理念に求めざるを得ない所にアンチノミーが発現する根本的理由が存

在する。悟性による「統一」から全く独立した、理性による異種の「統一」がある訳ではない。従って超越論的理念の形式的な構成もカテゴリーのそれに倣うことになる。

次に第二の注意点を見よう。

「だが第二に、カテゴリーがすべてこれに適しているという訳ではなく、適しているのはそれに於いて綜合がひとつの系列を、しかも被制約者に対する相互従属的（並存的ではない）制約の系列を構成しているカテゴリーなのである。絶対的総体性が理性によって要求されるのは、それが所与の被制約者に対する諸制約の上昇系列に関わる限りに於いてであつて、従つて諸帰結の下降列やこれらの帰結の並列的諸制約の集合が問題になる場合には、要求されないのである。何となれば、諸制約は所与の被制約者に関して既に前提されており、しかもこれと共に与えられたものと見做しうるからである。これに反して、帰結はその諸制約を可能ならしめず、むしろ前提するから、帰結への進み行きに於いて（或いは与えられた制約から被制約者への下降に於いて）、その系列が中断するか否かには無頓着でいられるのであり、しかも抑もその総体性に関する問は決して理性の前提ではないのである。

そのような訳で、与えられた瞬間に至るまで完全に経過した時間もまた与えられている（我々によつて規定されうるといふのではないが）。未来の時間に関しては、それは現在に至る制約ではないので、現在を把握するためには、我々は未来の時間を如何にしようとするかは、つまりそれを何処かで途切れさせようとするか無限に経

過させようとするかはどちらでもよいのである。」⁷⁾

理性が世界認識の統一のために用いようとするカテゴリーは限られている。無制約者の探究を自らの課題とする理性は、制約・被制約の系列を構成するカテゴリーのみに関わるのである。アンチノミー論に於いても、また「超越論的理想」論に於いてもそうなのだが、カントには忽せにできないひとつの根本的前提或いは確信があるようである。ここでは詳論しないが、それは「汎通的規定の原則」であつて、簡潔に言えば所与の被制約者はその制約成立の根源的条件として無制約者の存在を要請せざるを得ないというものである。この前提は上のふたつに於ける議論で重要な役割を果たしているのだが、カントが切り開いた新たな超越論的哲学に由来するものではなく、伝統的形而上学に由来する概念である。或る被制約者から下降的に次の被制約者へ次々に移行しても、無制約者は決して把握されない。アンチノミー論に於いて常に問題となる、理性が探究する無制約者を把握するためには、「汎通的規定の原則」と並行的な移行、即ち被制約者の前提となる、より高次の制約者を辿っていく「上昇的」移行に拠らねばならない。斯くしてカントはふたつの系列の綜合の区分けを行う。

「私は諸制約の側での系列の綜合を、それ故所与の現象に最も近い制約から始めて、より遠い制約に至る綜合を背進的（regressive）綜合と、被制約者の側での最も近い帰結からより遠い帰結へと進み行く綜合を前進的（progressive）綜合と名付ける。最初のものは前件へ（*in antecedentia*）と、次のものは後件へ（*in consequentia*）と進

ものである。それ故宇宙論的理念は背進的綜合の総体性に関わるのであって、しかも後件へではなく、前件へと進む。後者が生ずる場合には、それは純粹理性の必然的なではなく、恣意的な問題である。何故なら、現象に於いて与えられているものを我々が完全に理解するのに必要なのは、諸根拠であつて諸帰結ではないからである。¹⁰⁾

ここまではカテゴリーと超越論的理念との關係、そして理性が用いるカテゴリーの種類の概括的性格が述べられているが、その次では、悟性および理性と並んでアンチノミーの第三の要素として時間と空間が取り上げられている。今までの叙述からすると、やや意外な感があるが、アンチノミー論が徹頭徹尾「世界」に関わるものであることを考慮するならば、むしろ自然であるとも言えよう。超越論的感性論および分析論に於いて明らかにされたように時間と空間は人間の唯一可能な直観の形式であり、これ以外の直観形式は人間にとって存在しないから、現象としての世界はこの根源的な条件に従わざるを得ない。「超越論的理想」論に於けるように、専ら「物一般に関する純粹諸概念」(reine Begriffe von Dingen überhaupt)に関わる対象が問題となる場合は別であるが、現象の系列の絶対的総体性としての「世界」の統一像の可能性が論ぜられるアンチノミー論では、時間と空間という要素は不可欠のものなのである。

二

「さてカテゴリーの表に従つて理念の表をしつらえるためには、先ず我々のあらゆる直観のふたつの根源的量即ち時間と空間を取る。

時間はそれ自体ひとつの系列(しかもあらゆる系列の形式的条件)であり、それ故時間に於いては、所与の現在に関して、諸制約としての前件(過去のもの)が後件(未来のもの)からア・プリオリに區別されるのである。従つて、所与の被制約者に対する諸制約の系列の絶対的総体性という超越論的理念は、あらゆる過去の時間のみ関わるのである。理性の理念に従えば、所与の瞬間の制約としての、経過した時間全体は必然的に与えられていると考えられるであろう。だが空間に関しては、それ自体に於いては前進と背進の區別はない。空間はその部分が総じて同時にあるから、集合を構成するが系列を構成しないのである。私は現在の時点を、過去の時間に関して、被制約的としてのみ見做しえたのであつて、決してその制約として見做しえなかつたのである。何故なら、この瞬間は流れ去つた時間によつて(或いはむしろ先行する時間の流れ)によつて初めて生ずるからである。しかし空間の諸部分は相互に従属しているのではなく、並存しているから、ひとつの部分は他の部分の可能性を制約するものではない。そして空間は、時間とは異なつて、それ自体系列を構成しないのである。しかし我々がそれによつて空間を覚知するところの、空間の多様な部分の綜合は継起的(successiv)であつて、それ故時間の内に生じ、系列を含む。¹²⁾

日常的経験に照らして見るならば、時間がひとつの系列を構成するというのは、様々な問題があるにせよ、少なくとも議論としては分かり易い。現在の瞬間が過去の時間の経過の上に成立していることを、歴史や曆を例に挙げるまでもなく、少なくとも我々は自明の

こととして前提し、日々の生活を営んでいるはずである。未来のこととは不定であるが、過去のことは変更の余地がなく、既に確定したものであり、そしてその上に現在が成立するのである。そして現在は過去へと絶え間なく滑り落ちてゆき、確定した過去として現在を完全に制約する。斯かる信念があるからこそ、我々は現在の出来事が未来の出来事を制約する、換言すれば、過去となった現在が現在となる未来に対して支配権を振るうと考えて、未来のことを慮りながら、現在のことに気遣うのである。

しかし空間が「系列を含む」ということを理解するのはやや困難である。だからカントも上に見られるように、空間による系列の構成を一旦否定し、別の観点からの空間の「系列」性を主張するのである。カントが上に述べて述べていることの要点を簡潔に言えば、空間の諸部分の綜合に於いて、或る部分を取ればそれを制約する部分が考えられる、後者は前者の「限界」としてこれを制約するものであり、後者はまた他の空間によって制約される、ということになる。カントはここに空間の綜合の背進を見ており、「制約の系列に於ける綜合の絶対的総体性という超越論的理念」が時間の場合と同様空間についても、問題として成立すると考えている。アンチノミー論が関わる「世界」の形式が時間と空間である以上、理性がそれによって世界を統一しようとする超越論的理念が時間空間双方について成立する必要を見出さねばならないという、議論の整合性を重視するカントの意図はよく解るのであるが、未来・現在・過去という区分けが一応成立すると考えられる時間に比べて空間の場合は

議論に難点があるように筆者には思われる。目下取り上げている空間の背進性に関してカントが述べている一節を読んで見れば、誰しもその議論が揺れ動いていることが解るのではないだろうか。問題は部分としての空間とその制約となる空間である。部分と言ってもこれは任意に設定できる「部分」である（時間に関しても同じことが言えるであろう）。カントが挙げている「ルーテ」や「フース」という単位である必要は全くない。「センチメートル」や「マイル」であつても一向に差支えないし、また同じ単位を繰返し使う必然性もない。抑も「部分」を設定することが可能であろうかという疑問も提起されよう。つまり「部分」の取り方がひとつに定まっていな以上、その継起的綜合を論ずることはできないし、空間の「背進」性も問題になりえないであろう。更に難点を指摘するならば、遙か彼方に広がる空間は直接我々が「覚知」することのできないものではないか（例えば銀河系の外の空間等）。幾らでもその先が考えられる空間というのは殆ど思考実験の領域を出ないのであつて、我々の日常の経験を成立させている空間とは異なっているのである。尤も、カントに好意的な見方をすれば、問題は要するに我々には空間の「不可測定性（Unermessbarkeit）」しか与えられていないということなのであつて、経験の進展の内で空間の「限界」に突き当たることが期待できないということを述べているに過ぎないと解釈することもできよう。時間空間は世界に関する我々の経験を成立させている根源的な条件であるから、我々が如何なる統一的世界像の構成を試みよう、常に不可避の問題として我々に立ち現れて来るので

ある。アンチノミー論の第一のものとして時間空間の有限性・無限性に関わるアンチノミーが置かれているのも決して偶然ではないであろう。勿論「量」のカテゴリーに対応しているものとしてではあるが、この「量」が時間空間の「量」として捉えられていることが重要なのである。量のカテゴリーは単一性 (Einheit)、数多性 (Vielfalt)、全体性 (Allheit、或いは総体性 Totalität) の三つであるが、カント自身が注意しているように、各々の綱目のカテゴリーの第三のものは第一のものと第二のものと結合によって生ずるから、量のカテゴリーに関しては、「全体性(総体性)は単一性と見なされた数多性に他ならない」¹⁵⁾ということになる。それ故世界の絶対的総体性という超越論的理念には(絶対的)単一性および(絶対的)数多性の契機が必然的に含まれているのであり、世界の絶対的総体性を目指す理性の主張が、このふたつの契機に従ってそれぞれ上昇の時空系列の有限性の主張(定立)と無限性の主張(反定立)とに分裂すると考えられる。

次に質のカテゴリーに対応する超越論的理念であるが、ここには時間との繋がりはなく、空間との繋がりのみがある。¹⁶⁾「第二に、空間に於ける実在性即ち物質(Materie)は被制約者であって、その内的制約はその諸部分であり、しかも諸部分の諸部分は更なる諸制約であるから、ここには、理性がその絶対的総体性を要求するひとつの背進的綜合が生じうる。これは完全な分割による以外には生じ得ないのだが、これによって物質の実在性は無へと消失するか、或いは最早物質でないもの、即ち単純なものへと消失するかの何れ

かなのである。従って、ここにも諸制約の系列と無制約者への進み行きが存する訳である」¹⁷⁾

上述の空間量に関する場合と比較すると、「内的制約」という表現で、いわば考察の方向が異なることが先ず分かる。上の場合には、外側に限りなく拡がってゆく空間が考えられていたのに対し、こちらの場合には空間の一部を占める物質という観点から、一定の空間の可分割性ではなく、物質そのものの可分割性が問題になっている。質のカテゴリーは実在性 (Realität)、否定性 (Negation)、制限性 (Limitation) であるが、カントは「空間に於ける実在性即ち物質」に実在性のカテゴリーとの対応を見ており、外側に拡がる単なる空間量に対応する量のカテゴリーとの対照がここに看取されるようである。物質の無限分割が可能だとすると、物質の実在性は、カントに従えば、「無へと消失する」¹⁸⁾。この場合「内的」な背進的綜合は無限であり、完結することがない。また物質の無限分割が不可能だとすると、物質の部分に関する「内的な」背進的綜合は最早それ自身物質ならざる「単純なもの」という限界に辿り着き、完結することになる。前の場合に対応するカテゴリーは否定性であり、後の場合に対応するのは制限性のカテゴリーである。カテゴリーに関して成立する上述の原則に従うと、「制限性」は否定性と結合した実在性に他ならない¹⁸⁾のであるから、空間量の場合とは異なって、第一のものと第二のものがそれぞれ定立と反定立の契機になるという関係にはなっていないようである。第二アンチノミーの定立と反定立の対立の契機となるカテゴリーはそれぞれ否定性と制限性であるが、これ

は共に実在性に対する何らかの否定の上に成立しているという特徴を有している。質の第一のカテゴリリーである実在性という共通の基盤の上で対立が生じている訳であり、量のカテゴリリーに基づく第一アンチノミーの場合と比べると、空間に関わるという点では一部共通性が認められるが、アンチノミー発現の構造が異なっているのである。これは空間の「合成」と「分割」という相反する考察方向の差異だけに尽きる問題ではないであろう。

三

さて第一および第二の宇宙論的理念は「あらゆる現象の数学的全体」である「世界」に関わるが、第三および第四のそれは「力学的全体」である「自然」に関わる。¹⁹前者に関しては上に見た通りであるが、後者は如何なるものであろうか。先ず注目すべきは後者に於いては用いられないカテゴリリーがあるということである。これは既にカントが注意していたことであつた。前者の場合には量のカテゴリリー、質のカテゴリリーの全てが用いられる(すべてが表立った形であるという訳ではないにせよ)が、後者の場合には完全に脱落してしまうカテゴリリーが存在する。

「第三に、現象間の実在的関係のカテゴリリーに関しては、実体とその偶有性のカテゴリリーは、超越論的理念には適さない。即ち理性はこのカテゴリリーに関して背進的に諸制約へと赴く根拠を持たないものである。何となれば、偶有性は(ひとつの統一の実体に内属する限り)相互に並存(koordiniert)して、系列を構成しないからである。

実体に関しては、偶有性は本来実体に従属(subordiniert)するものではなく、実体の存在様式なのである。……このことはまた相互性の内にある諸実体についても当てはまる。それらは専ら集合であつて、系列の指標となるもの(Exponenten)を持たない。というのもそれらは自らの可能性の諸制約として互いに従属していないからである。この可能性の相互従属ということは、その限界が決してそれ自体に於いてではなく、常に他の空間によつて規定される空間に関しては言い得たであろうが、それ故因果性のカテゴリリーのみが残るのであつて、これはある与えられた結果に対する原因の系列を提示するのだが、それに於いて被制約者としての前者から諸制約としての後者へと上昇し、理性の間に答えることができるのである。²⁰」

斯くして関係のカテゴリリーの中で、理性が超越論的理念として用いようとするのは、因果性のそれだけであり、第三アンチノミーに於いて原因の上昇系列の有限性と無限性がそれぞれ定立と反定立に分かたれて主張されるのである。前者では上昇系列の限界である第一原因としての自由(超越論的自由)の存在が肯定され、後者ではそれが否定されて因果連鎖の無限系列の主張の内に決定論的世界像が提示される。

様相のカテゴリリーの場合には偶然性のそれしか用いられない。

「第四に、可能、現実および必然という概念は系列に到達しない。但し、次の場合は別である、即ち現存している偶然なものはいつでも制約されていると見做されなければならず、そして悟性の規則に従つてひとつの制約を指示する限りは別なのであるが、こうした

この下に、この制約を更に高次の制約へと指示することが必然となり、ついには理性がこの系列の総体性に於いてのみ無制約的必然性に邂逅することになるのである。²¹⁾

世界の中の存在者即ち偶然的存在者は被制約的であるから、これに先立つ制約者を必然的におのれの存在の前提として持つことになる。この系列の総体性に於いて見出されうると考えられるのは、何かを制約するが最早それ自身は制約されることのない無制約者であるから、これは偶然的存在者ではない必然的存在者なのである。従つて世界のあらゆる偶然的存在者の原因としてのそれ自身無制約的な必然的存在者の存在・非存在が第四アンチノミーでの主題となる。それは偶然的存在者の上昇系列の有限性とその限界としての必然的存在者の存在の主張（定立）と、一方これを限界として持たない（従つて必然的存在者の存在が否定される）、偶然的存在者の上昇系列の無限性の主張（反定立）とに分かたれる。

四

以上から、カテゴリーの四綱目に応じて、四つの宇宙論的理念が生ずることになる。

- 一、あらゆる現象の所与全体の合成（Zusammensetzung）の絶対的完全性
- 二、現象に於ける所与全体の分割（Teilung）の絶対的完全性
- 三、現象一般の生起（Entstehung）の絶対的完全性

四、現象に於いて変化するものの現存在の従属性（Abhängigkeit des Daseins）の絶対的完全性²²⁾

理性は現象の系列の絶対的完全性という理念を持つが、超越論的分析論に於いて説明されたように、人間の認識は「直観の多様の継起的総合」という「特殊な制限」に拠るしかないから、理性が幾ら認識の完全性を要求しても、直観の背進的综合の絶対的総体は与えられ得ない。感性的制約を離れたカテゴリーの純粹適用が可能ならば、全系列を一挙に把握することもできようが、それは人間の認識の構造上不可能である。それ故、カントが「絶対的総体性の理念が関わるのは現象の解明以外の何ものでもなく、従つて物一般という全体の純粹悟性概念に関わるのではない」と注意していることは極めて重要である。上の四つの宇宙論的理念は何れも現象統一に関する絶対的完全性を表現しているのであるが、理性は直観の背進的综合に従属せねばならないから、理性は、背進的综合の絶対的総体性に拠つて、現象統一の完全性を目指すことになる。そしてこの総体性は、無制約者を以て与えられる。

無制約者に関する表象の仕方は二通りある。無制約者が全系列である場合と、全系列の一部分である場合である。

「一の無制約者は二様に構想されうる。ひとつは専ら全系列に於いて存し、それ故全ての項が例外なく制約されていて、系列全体のみが端的に無制約的となろうという場合であり、そうすると背進は無限である。もうひとつは、絶対無制約者は、その他の項がそれに従

属する所の、系列の一部に過ぎないのであって、それ自身は如何なる他の制約の下にない、という場合である。⁽²⁶⁾

前者は、各アンチノミーの反定立の構造を構成するものであって、系列の上昇は無限となり、「系列全体は与えられている」が、系列の背進は完結しない。後者は、各定立の主張の根拠となるものであり、上昇の系列の限界としての「第一のもの」(ein Erstes)を想定するものである。この場合は、「第一のもの」を以て系列は完結することになる。アンチノミーの順序に従って言うと、「第一のもの」は、それぞれ「世界の始まり」(時間に関して)と「世界の限界」(空間に関して)、「単、純、体」、「絶対的、自、己、活動(自由)」、「絶対的、自然、必然性」である。⁽²⁷⁾ 定立・反定立の何れに於いても無制約者が探究されるが、それはそれぞれに於いて「第一のもの」と「系列の全体」という異なったものである。理性は無制約者を「究極目的」とし、これを以て現象系列の総体性を把握しようとするが、相容れない二様の無制約者が表象されるため、アンチノミーが発現せざるを得なくなるのである。⁽²⁸⁾

最後に、カントは「世界」概念の区分けを試みている。屢々混同される「世界」と「自然」の区別に関しては上に触れたが、無制約者に関しても数学的無制約者と力学的無制約者が区別され、第一および第二の宇宙論的理念が目指す数学的無制約者は「狭義に於ける世界概念(大小両世界の概念)」、第三および第四の宇宙論的理念が目指す力学的無制約者は「超越的(transzendente)自然概念」と規定される。⁽²⁹⁾ 両者とも経験の総合を経験を超越するところまで押し

進めるという意味で「超越的」であることは共通しているが、前二者に於いては、時空を根源的条件とする感性的な現象系列の制約は再び感性的な同種の現象であり、経験の総合をどれほど押し進めても、その外に一步も出ることはないのに対して、後二者の場合は、因果結合の力学的総合の場合でも、偶然的なものとは必然的なもののその場合でも、感性的な現象の系列の同種の総合のみならず、異種の総合の可能性が認められる。即ち系列の外にある「可想的な」制約が想定されうるのである。⁽³⁰⁾ これは現象系列の外にある、非感性的な、従ってそれ自身最早現象ではない制約であるが、現象系列を断絶することのない「経験的に無制約的」なものとなる。数学的無制約者に関わる第一および第二アンチノミーの定立・反定立が共に偽とされるのに対して、力学的無制約者に関わる第三および第四アンチノミーのそれらが共に(異なつた意味に於いてであるが)真たりうるとされるのは、現象の同種の系列の想定と、それを断絶しない異種の系列の想定が相互に矛盾しないからである。⁽³¹⁾ 尤も、本稿が関わってきた超越論的弁証論第二篇第二章第一節では、先の世界区分が論述の進行につれて重要となりうることが示唆されるに留まっているので、本稿ではこれ以上立ち入らないことにする。

既に第一節だけでアンチノミー論に関する基本的かつ重要な問題は、大凡出尽くしているようである。次の課題は、アンチノミー論総論とも言える第一節に於ける問題点が各アンチノミーに於いて如何に展開され、如何なる新たな問題を生ずるかを探ることになろう。

【註】

使用した『純粹理性批判』のテキストは、Philosophische Bibliothek Bd. 37a (hrsg. v. Dr. Raymond Schmidt, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1976) に拠った。通例に従い、第一版をA、第二版をBと示す。

引用文中の()内は全て原著者のもの、傍点およびゴシック体は、それぞれ原典でのゲシュペルトとゴシック体に相当する。

(1) 筆者は常々思っていたのだが、dogmatischを「独断(論)的」と訳すのは如何なものであろうか。この語は果たして「独りよがり」という意味合いを持つてゐるのであろうか。

(2) A507/B535.

(3) Vgl. A406/B433.

(4) A407/B434.

(5) Vgl. A422/B450, A485-90/B513-18.

(6) A408-9/B435-6.「表」は四の冒頭にある。

(7) A409-10/B436-7.

(8) 恐らくはライブニッツの充足理由律に淵源し、ヴォルフ学派を経由してカントが受け取ったと思われる「汎通的规定の原則」は個物の存在様式に関わる原則であり、特に超越論的弁証論第二篇第三章「純粹理性の理想」に於いて重要な役割を果たすものであるから、ここでの議論とは直接の関係はないと反論されるかもしれない。しかし、被制約者の制約の究極的根拠としての無制約者の想定という議論の構造そのものは同一である。所謂前批判期からカントが斯かる思考に親しんでいたことを確認するには、例えば、一七五五年の「形而上学的認識の第一原理の新解明」第二章を参照すればよい。

(9) regressivは「遡源的」という訳語の方が適切かもしれないが、筆者は以前このように訳していた。しかし、本稿ではprogressivを「前進的」と訳したのに対応させて、「背進的」という訳語を用ひることにする。

(10) A411/B438.

(11) A566/B594. 格は変えた。

(12) A411-2/438-9.

(13) 尚、カント自身が言っているように空間の部分の継起的綜合が時間の内に生ずるとすると、空間に関するアンチノミーは、構造上時間に関するアンチノミーから派生したものに過ぎないということにならないだろうか。時間に関するアンチノミーの方が根源的であつて、空間に関するそれは、これの単なる現象形態であるとも言えるだろう。周知の如く、空

間に対する時間の構造的優位性は超越論的感性論および超越論的分析論に於いて既にカントが主張していたところでもある。

(14) Vgl. Heinz Heimsoeth, Transzendente Dialektik II, Berlin 1967, S.207, Anm. 20.

(15) B111.

(16) 尤も、論述の表面に現れていないというだけである。空間の分割の場合にも継起的綜合が生ずるのであるならば、それは時間の制約を免れない。ここで問題になっているのは、空間の可分性というよりもむしろ物体のそれであるから、時間を考慮する必要はないだろうという反論も予想されるが、カントも認めるように(Vgl. A525/B553)、「物体(Körper)の可分性は空間の可分性に基つてゐる」ならば、物体の分割の場合にも、その継起的綜合は時間の制約下にある。一体、第一アンチノミーに於いては部分の綜合という観点から空間が捉えられているのに対し、第二アンチノミーに於いては空間の部分(物体が占める領域)がひとつの全体として捉えられ、そしてその部分の背進が論ぜられるのであり、従つて、同一の空間部分がある時には部分、ある時には全体として考察されている訳である。やや恣意的とも思われる空間の取り扱い方であるが、延長性と可分性という、空間に関する古来からの問題のふたつの側面を見るべきなのだろう。

(17) A413/B440.

(18) B111.

(19) Vgl. A418-9/B446-7.

(20) A413-4/B441.

(21) A415/B442.

(22) A415/B443.

(23) Vgl. A417/B444.

(24) A416/B443.

(25) A417/B445.

(26) Vgl. A418/B446.

(27) a.a.O.

(28) 尤も、理性にとつては制約の全体性である「総体性」のみが問題であるから、無制約者が何れかに決定されなければならないということはないのである。

尚、A322/B379を参照せよ。

(29) Vgl. A418-20/B446-8.

(30) Vgl. A529-32/B557-60.

- (31) Vgl. A531/B559 Anm.
(32) Vgl. A560-5/B588-93.

【付記】

本稿は平成十四年度工学院大学総合研究所一般研究費による研究成果の一部である。

(くさの あきら・本学共通課程助教授)